

小中連携からみる体育・保健体育のあり方についてⅡ

—平成29年度版学習指導要領解説にみる運動・保健領域の系統性を中心に—

加 藤 純 一（文教大学教育研究所客員研究員）

Ideal Physical and Health Education through Elementary and Junior High School II:

Focus on Systematics of Physical and Health Domains Described in 2017
Guidelines for Teaching

KATO JUNICHI

(Guest Researcher Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

平成28年「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」では、「指導の一貫性の確保」として学習指導要領の系統性を押さえた上での教科等の縦断的、横断的な系統性・連続性が求められている。この実践には整理された系統図の作成と、それらを共有することが挙げられている。筆者は2015年に、「小中連携からみる体育・保健体育のあり方について —運動領域の系統性を中心に—」として、体育・保健体育における小学校と中学校の系統性を示すための系統図を示した。本稿では同様の手法を用い、平成29年に上梓された小学校と中学校の「新学習指導要領」を基に、体育・保健体育における運動領域の小中接続を念頭においた系統性を系統図として示し、今回の改定において新たに示された系統性について言及した。

キーワード 系統性 系統図 運動領域 学習指導要領 小中一貫

1. はじめに

文部科学省は平成28年12月に「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」を著している。⁽¹⁰⁾ そもそも、平成24年7月に開催された初等中等教育分科会の第80回会議において「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」⁽¹¹⁾ が配布され、そこで小学校から中学校に進学する際に生ずる中1ギャップの問題が指摘され、各児童生徒の小学校時点における学習上の課題を中学校と十分に共有されていないことを指摘している。¹⁾ 先の平成28年「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」は、時系列的にみても、これらの指摘に対する解消方法を提示したものと言える。

筆者は、平成27年に「小中連携からみる

体育・保健体育のあり方について —運動領域の系統性を中心に—」を執筆し、体育・保健体育における小中連携を運動領域の系統性から分析を行った。²⁾ そこでは、体育・保健体育の運動領域が小学校から中学校へと、どのような形で展開しているのかを明示し、系統性の有無を明らかにした。これは、後に述べることとなるが、平成28年「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」においても「指導の一貫性の確保」として、教科における系統性や連続性を踏まえた学習指導が謳われているところとも一致をみるところである。

そこで、本稿では平成29年に上梓された「新学習指導要領」を基に、前回同様に体育・保健体育における運動領域の小中接続を念頭

においた系統性を系統図として示すとともに、旧学習指導要領における小中の接続と比較を行い、系統性として新たに何が示されたのかを提示することとした。³⁾

2. 平成28年「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」

前述の平成28年に出された「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」（以下、「小中一貫の手引」とする）について、ここではその概略を示しておく。

「小中一貫の手引」の「はじめに」⁴⁾には、平成27年6月の通常国会で、9年間の義務教育を一貫して行う新たな学校の種類である「義務教育学校」の設置を可能とする改正学校教育法が成立したことを受け、「小学校と中学校が別々の組織として設置されていたことに起因していた様々な実施上の課題が解消され、教育主体・教育活動・学校マネジメントの一貫性を確保した取組が容易になるなど、全ての教職員が義務教育9年間に責任を持って教育活動を行う小中一貫教育の取組を継続的・安定的に実施できる制度的基盤が整備されたものと考えています。」とある。つまり、国による制度的基盤が整備されたことにより、小学校と中学校とが別々の組織として設置されていたことに起因した様々な実施上の課題が解消されることが期待され、それにより全ての教職員が教育活動を義務教育9年の間、継続的、安定的に行うことができるようになったというのである。しかし一方で、小中一貫教育の導入自体が目的ではなく、「義務教育9年間を連続した教育課程として捉え、児童生徒・学校・地域の実情等を踏まえた具体的な取組内容の質を高めること」が重要であり、そのためには「新たに導入を希望する設置者に対するソフト面での支援が重要になってくる」としている。ここで注目すべきは、「取組内容の質を高めること」である。このことについて「小中一貫の手引」では、「手

引の位置付け」⁵⁾の中で、「小中一貫教育の制度化を契機として、より質の高い取組を推進する観点」から、「小中一貫教育の新規導入を希望する自治体・学校」「将来的な一貫教育の導入検討も念頭に置きつつ、当面小中連携の高度化を図る自治体・学校」「小中一貫教育を導入しているものの本格的な取組に至っていない又は取組推進上の課題を抱えている自治体・学校」を主たる対象として、「小中一貫教育の核となる教育課程や指導計画の作成・実施を中心に据え、全国各地の多様な工夫の例や留意事項を盛り込んで作成したもの」と説明している。つまり、より質の高い小中一貫教育に取り組むためには「教育課程や指導計画の作成・実施を中心に据え」ることが求められるということになる。では、「小中一貫の手引」では、この「教育課程や指導計画の作成・実施」についてどのように展開されていくのであろうか。

第2部「小中一貫教育の教育課程の編成・実施に関する様々な工夫」の第4章「指導の一貫性の確保」には、「取組の工夫」として「教科等の系統性・連続性を踏まえた学習指導」「教育課程の特例の活用」「教科等を横断した学習指導に関する工夫」「生徒指導・生活指導に関する工夫」「評価に関する工夫」が挙げられている。⁶⁾ 小中の一貫教育では、小学校と中学校との接続をスムーズに行うことにより、例えば「中1ギャップ」などが解消されるとされるが、その裏には教育課程の一貫性、あるいは系統のある学習指導、さらには生徒指導や生活指導、指導と評価の一体化などがあつての「解消」ということになる。上記の5つのような取組を基にしながら、指導の一貫性を確保する教育課程の編成や実施が求められるということになるのである。

ところで、筆者の関心はこのなかの「教科等の系統性・連続性を踏まえた学習指導」である。後に示す「新学習指導要領」に則した体育・保健体育の系統図も、ここに指摘され

ている「大綱的基準である学習指導要領の系統性をしっかりとおさえること」⁷⁾とある、9年間を見通した教育課程を編成する上で必要とされる系統性や連続性を形に表したものである。この「教科等の系統性・連続性を踏まえた学習指導」⁸⁾は、「学習指導要領の確認や創意工夫された教科書の活用」「系統図や指導計画の作成・活用」「下学年の既習事項の復習」「知識と知識を関連づけた指導の充実」からなる。これらの内容の概略を示すと、「学習指導要領の確認や創意工夫された教科書の活用」では、学習指導要領の各学年の目標や指導事項を学習指導要領解説にある系統表等を参考にしながら、一覧性のある形に整理⁹⁾した上で、児童生徒の実態を当該目標との関係で再確認すること、系統性・連続性を確保するための工夫が講じられた教科書の意図を読み取り、活用することで児童生徒の学習内容の定着を促すことが挙げられている。また、「系統図や指導計画の作成・活用」では、9年間を通して、単元と単元の関係を系統図として整理し、それを活用して小中の乗り入れ指導を効果的に取り入れたり、上学年を見通してつまづきを速やかに解消する指導や下学年の既習事項を意識した指導を充実させたりすること、全学年の全ての単元ごとに目標やねらい、学習内容、家庭学習の課題等を整理した「指導計画」を毎年度編集し、児童生徒や保護者と共有した上で、見通しをもった継続的な指導や学習支援に役立てている事例があるとしている。さらに「下学年の既習事項の復習」では、教科等の系統性・連続性を踏まえた学習指導を進める中で、児童生徒の学び直しの機会を充実させていくことが期待されるとして、「デジタル教科書」やICTの活用を通じた工夫がみられるとしている。最後の「知識と知識を関連づけた指導の充実」では、教科等を横断的に結ぶことによる知識相互間の関連付けを行わせるための工夫について、ワークショップ型の研修等を

通じて教員間で共有していくことも考えられるとしている。

このように見てくると、「教科等の系統性・連続性を踏まえた学習指導」では、学習指導要領の系統性を押さえた上で、教科等の縦断的、横断的な系統性・連続性が求められ、それを実践するに際しては一覧性のある形に整理された系統図を作成し、それらを教員間のもとより児童生徒や保護者とも共有することで、つまづきの予知や学び直しの機会の充実に役立て、総じて9年間を見通した教育課程を編成していくことが必要となると言えよう。

では、「指導の一貫性を確保」する「系統性・連続性を踏まえた学習指導」を実践するための体育・保健体育の系統図とはどうなるのか。平成27年に筆者が示した系統図の作成手法を用いて、次にそれを示すこととする。

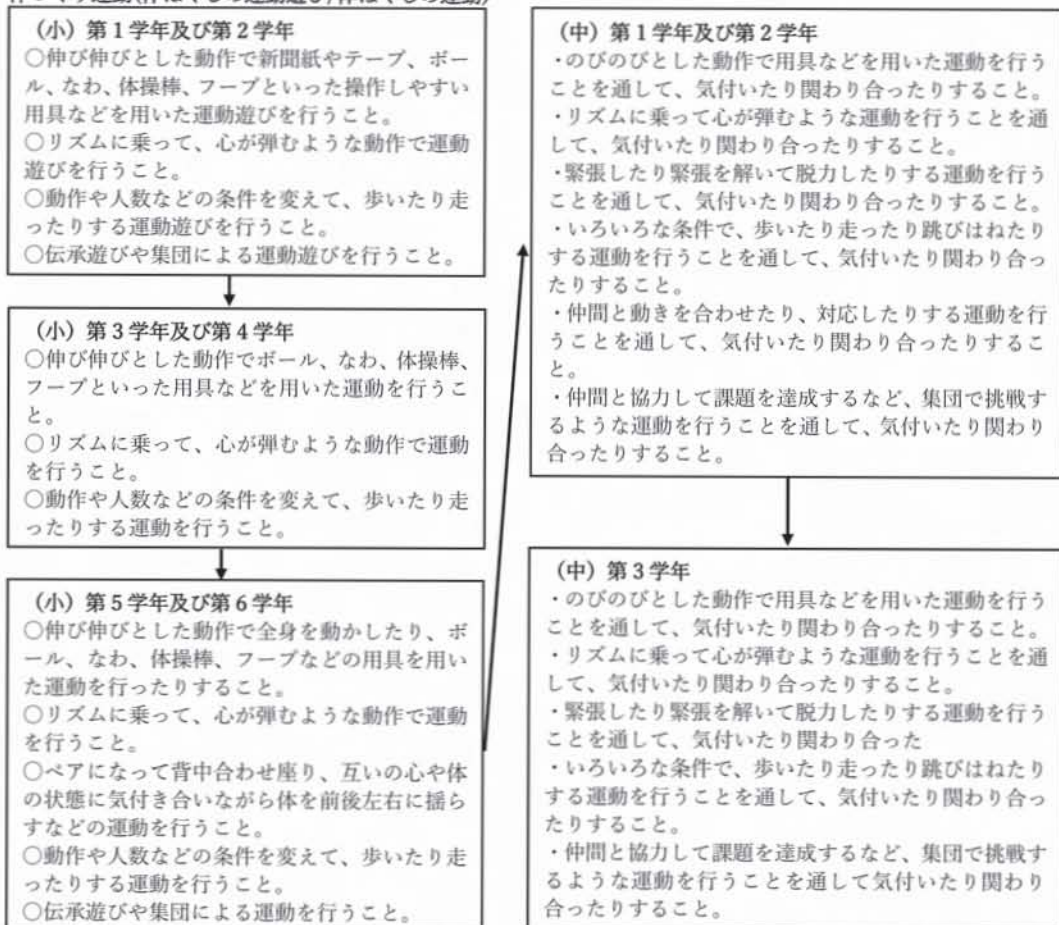
3. 平成27年「学習指導要領解説」に見る小中学校の運動領域ならびに保健領域の系統図

ここでは、平成29年に示された『小学校学習指導要領解説 体育編』¹⁰⁾及び『中学校学習指導要領解説 保健体育編』¹¹⁾に記載されている各運動領域と保健領域の内容を、系統的に図式化した(図-1を参照)。

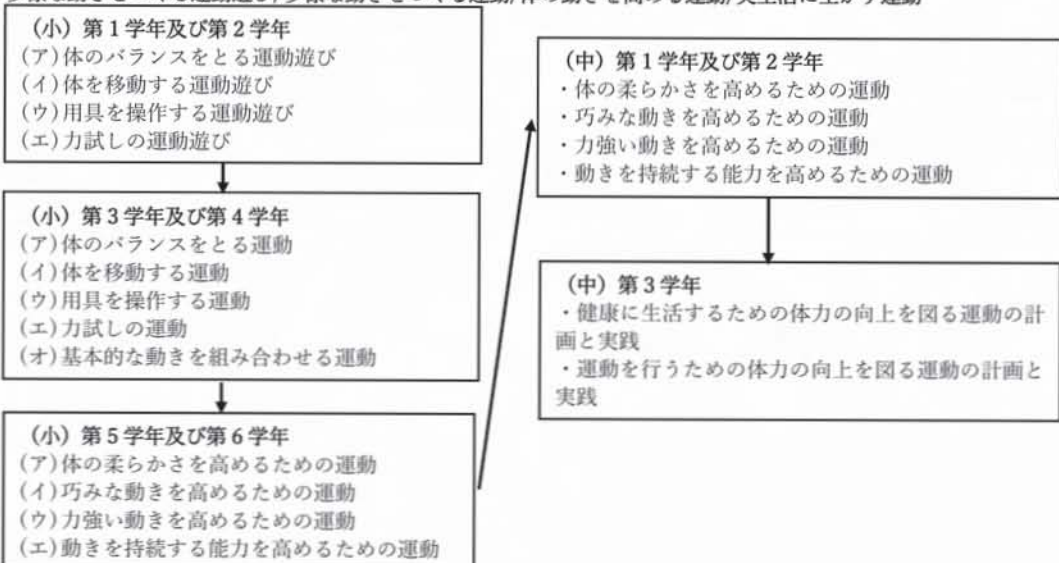
ところで、中学校編には「動きの例」として、「小学校 5・6年」「中学校 1・2年」「中学校 3年」に区分された系統図が示されている。本稿ではこれを参考にしつつ、さらに各解説に記載されている情報を盛り込む作業を行なった。その際に、技の名称や用語、動作説明についてはそのままの形で取り上げるようにした。また、各技術や動作がどのように展開していくかがわかるように、矢印を用いてその方向性を示した。中学校初出の領域や運動については、その中での展開を示した。

表 1

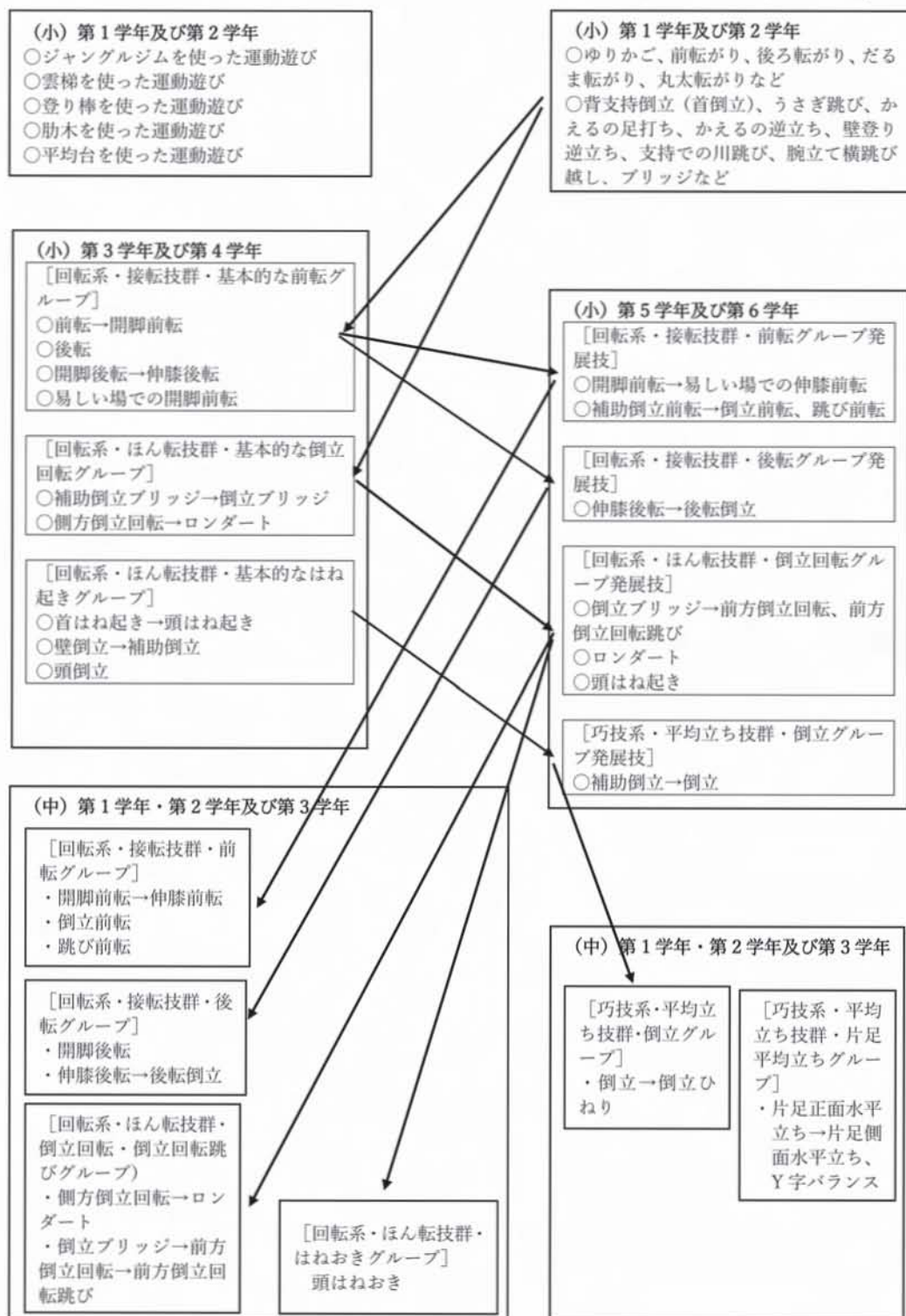
体づくり運動(体ほぐしの運動遊び/体ほぐしの運動)



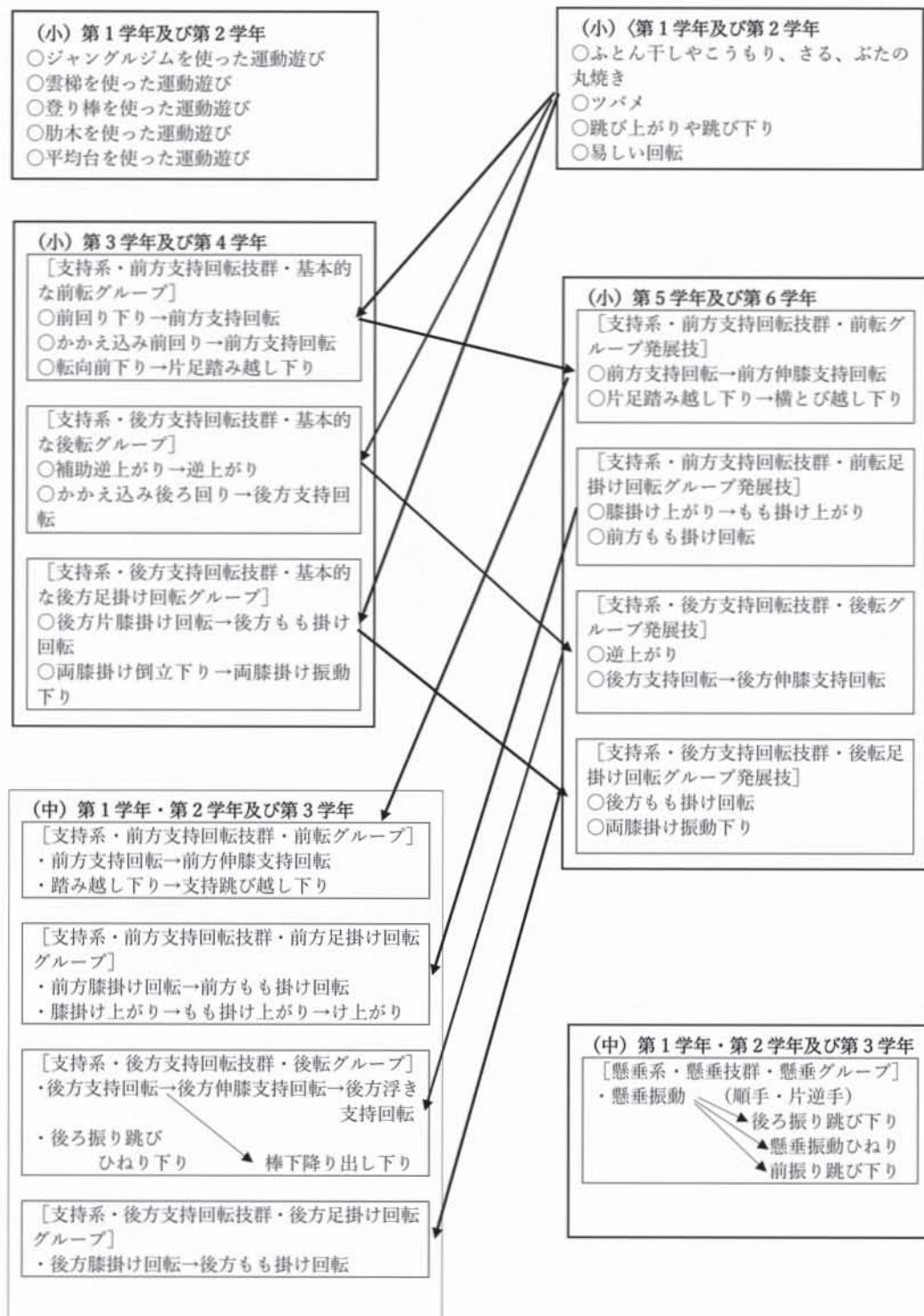
多様な動きをつくる運動遊び/多様な動きをつくる運動/体の動きを高める運動/実生活に生かす運動



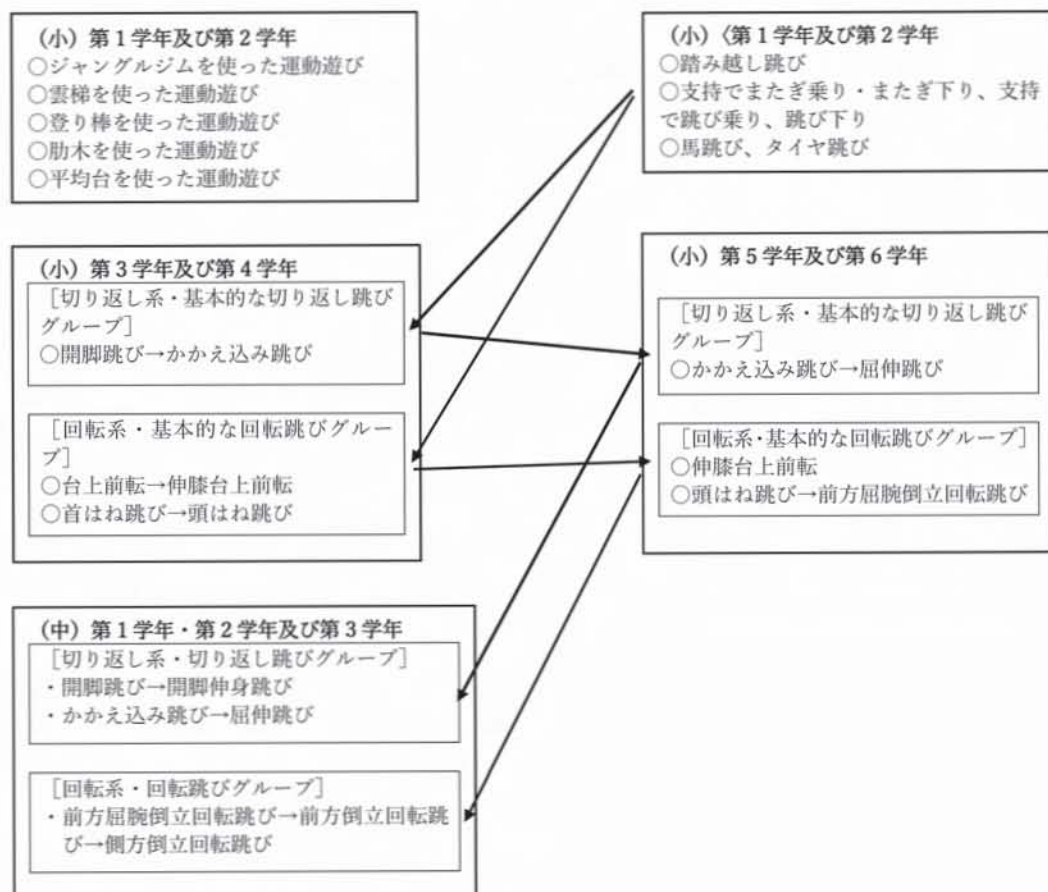
器械・器具を使つての運動遊び/器械運動(固定施設を使った運動遊び/マットを使った運動遊び/マット運動)



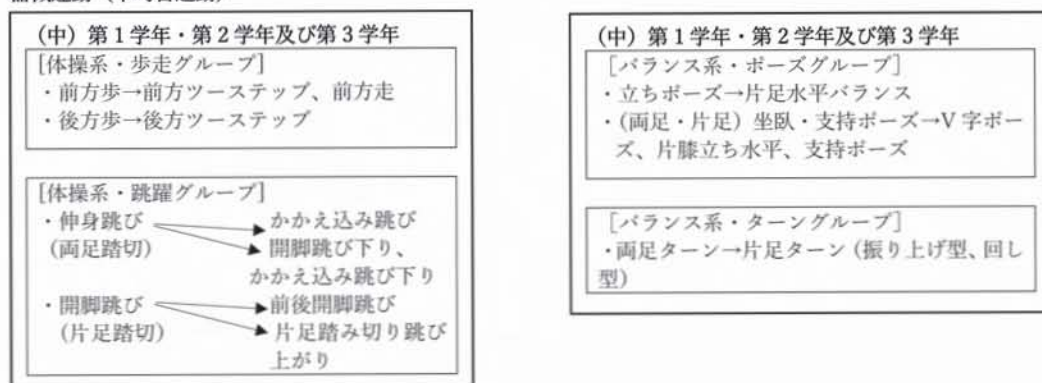
器械・器具を使つての運動遊び/器械運動(固定施設を使った運動遊び/鉄棒を使った運動遊び/鉄棒運動)



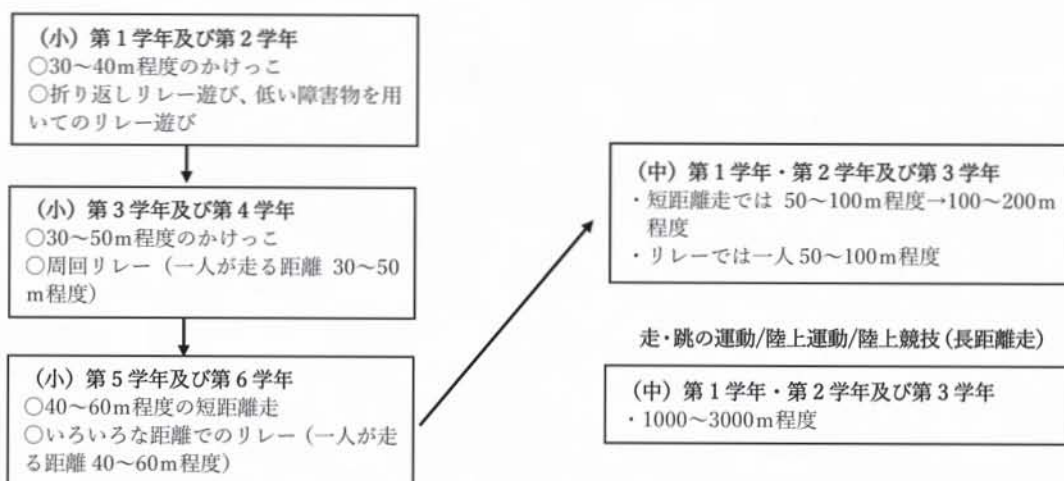
器械・器具を使つての運動遊び/器械運動(固定施設を使った運動遊び/跳び箱を使った運動遊び/跳び箱運動)



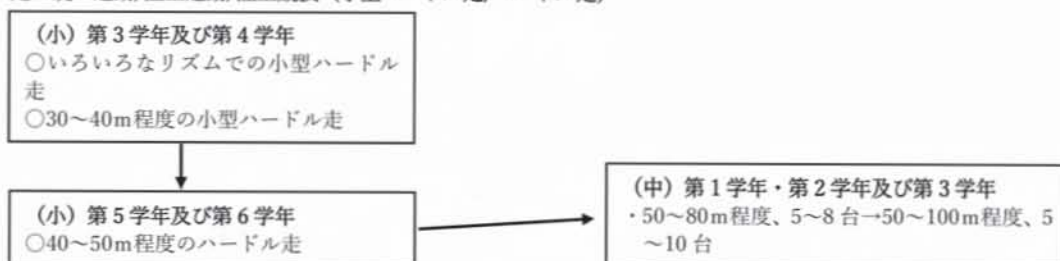
器械運動(平均台運動)



走・跳の運動/陸上運動/陸上競技 (走の運動遊び/かけっこ・リレー/短距離走・リレー)



走・跳の運動/陸上運動/陸上競技 (小型ハードル走/ハードル走)



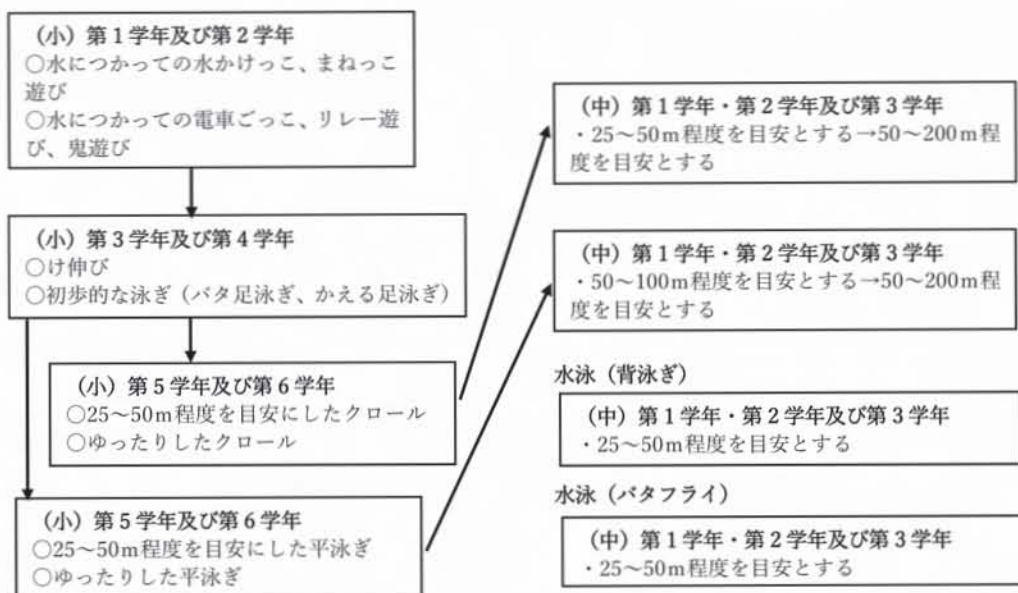
走・跳の運動/陸上運動/陸上競技 (幅跳び)



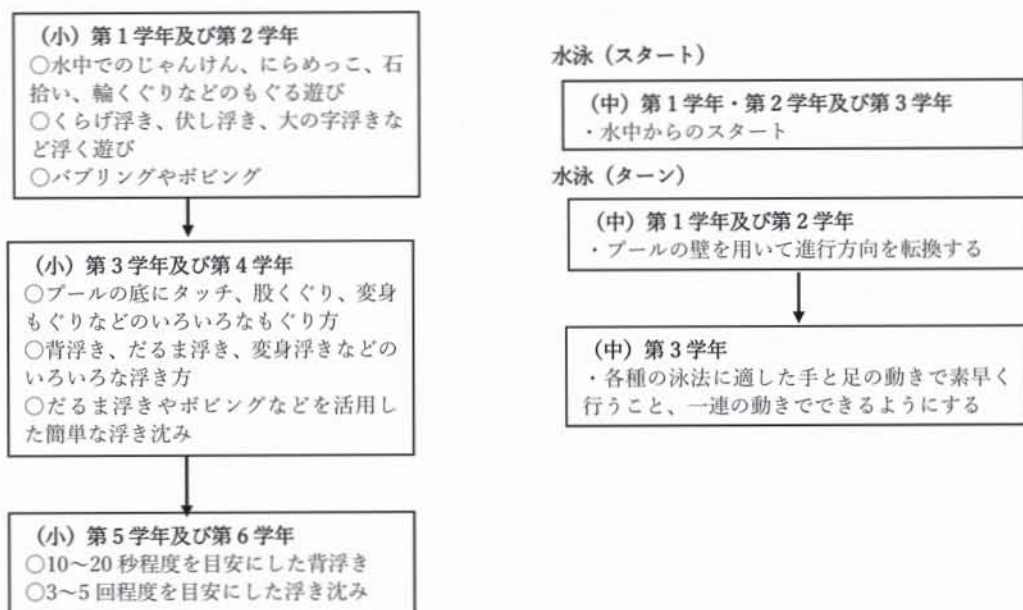
走・跳の運動/陸上運動/陸上競技 (高跳び)



水遊び/水泳運動/水泳（水の中を移動する運動遊び/浮いて進む運動/クロール・平泳ぎ）



水遊び/水泳運動/水泳（もぐる・浮く運動遊び/もぐる・浮く運動/安全確保につながる運動）



ゲーム/ボール運動/球技（ボールゲーム）

（小）第1学年及び第2学年

- 的当てゲーム
- シュートゲーム
- 相手コートにボールを投げ入れるゲーム
- 攻めがボールを手などで打ったり蹴ったりして行うゲーム

ゲーム/ボール運動/球技（鬼遊び）

（小）第1学年及び第2学年

- 一人鬼、手つなぎ鬼、子増やし鬼
- 宝取り鬼、ボール運び鬼

ゲーム/ボール運動/球技（ゴール型ゲーム/ゴール型）

（小）第3学年及び第4学年

- ハンドボール、ボートボール、ラインサッカー、ミニサッカーを基にした易しいゲーム
- タグラグビー、フラッグフットボールを基にした易しいゲーム

（中）第1学年・第2学年及び第3学年

- ・バスケットボール、ハンドボール、サッカー、（ラグビー）

（小）第5学年及び第6学年

- バスケットボール、サッカー、ハンドボール
- タグラグビー、フラッグフットボール

ゲーム/ボール運動/球技（ネット型ゲーム/ネット型）

（小）第3学年及び第4学年

- ソフトバレーボールを基にした易しいゲーム
- ブレルボールを基にした易しいゲーム
- バドミントン、テニスを基にした易しいゲーム

（中）第1学年・第2学年及び第3学年

- ・バレーボール、卓球、テニス、バドミントン

（小）第5学年及び第6学年

- ソフトバレーボール、ブレルボール
- バドミントン、テニス

ゲーム/ボール運動/球技（ベースボール型ゲーム/ベースボール型）

（小）第3学年及び第4学年

- 攻める側がボールを蹴って行う易しいゲーム
- 手や用具を使って打ったり、静止したボールを打ったりして行う易しいゲーム

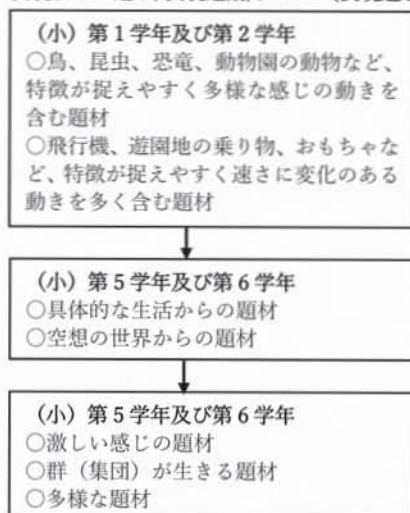
（中）第1学年・第2学年及び第3学年

- ・ソフトボール

（小）第5学年及び第6学年

- ソフトボールを基にした簡易化されたゲーム
- ティーボールを基にした簡易化されたゲーム

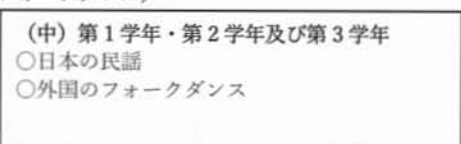
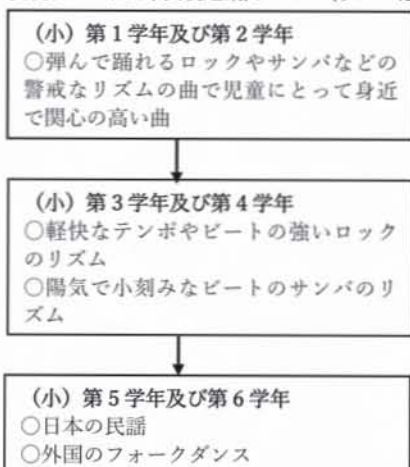
表現リズム遊び/表現運動/ダンス（表現遊び/表現）



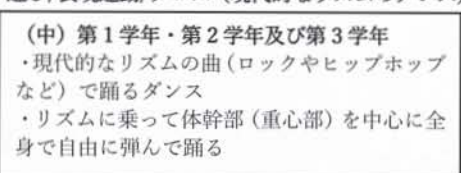
表現リズム遊び/表現運動/ダンス（創作ダンス）



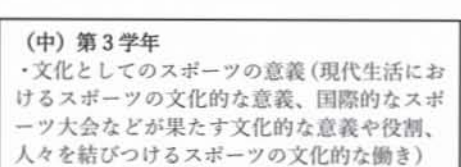
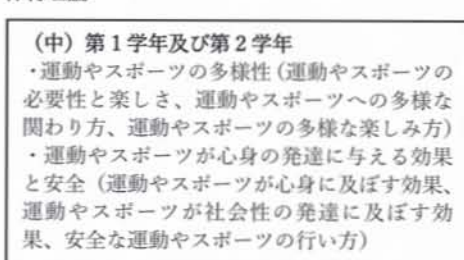
表現リズム遊び/表現運動/ダンス（リズム遊び/リズムダンス/フォークダンス）



表現リズム遊び/表現運動/ダンス（現代的なリズムのダンス）



体育理論



武道（柔道）

（中）第1学年及び第2学年

- 基本動作（自然体、崩し、すり足、歩み足、蹴ぎ足）
- 受け身（横受け身、後ろ受け身、前回り受け身）
- 投げ技（膝車、支え釣り込み足、体落とし、大腰、大外刈り）
- 固め技（けき固め、横四方）

（中）第3学年

- 基本動作（自然体、崩し、すり足、歩み足、蹴ぎ足）
- 受け身（横受け身、後ろ受け身、前回り受け身）
- 投げ技（小内刈り、大内刈り、釣り込み腰、背負い投げ）
- 受け身（横受け身、後ろ受け身、前回り受け身）
- 投げ技（膝車、支え釣り込み足、体落とし、大腰、大外刈り）
- 固め技（けき固め、横四方）
- 投げ技の連絡（大内刈りから大外刈り、釣り込み腰から大内刈り、大内刈りから背負い投げ）
- 固め技の連絡（けき固め、横四方、上四方の連絡）

武道（剣道）

（中）第1学年及び第2学年

- 基本動作（自然体で中段、歩み足、送り足）
- 応じ技（抜き技：面抜き胴）
- しかけ技（二段の技：小手一面、面一胴、引き技：引き胴）

（中）第3学年

- 基本動作（自然体で中段）
- しかけ技（二段の技：面一面、面一胴、引き技：引き面、出ばな技：出ばな面、払い技：払い面）
- 応じ技（抜き技：小手抜き面）

武道（相撲）

（中）第1学年及び第2学年

- 基本動作（踏踏姿勢、塵浄水、四股、腰割り、中腰の構え、運び足、すり足）
- 受け身
- 押し、寄り、前さばき（いなし）
- 投げ技（出し投げー受け身）

（中）第3学年

- 基本動作（踏踏姿勢、塵浄水、四股、腰割り、中腰の構え、運び足、すり足）
- 受け身
- 押し、寄り、前さばき（押しーいなし、寄りー巻き返し）
- 投げ技（上手投げー受け身、下手投げー受け身、突き落とし、受け身）

保健/保健分野

（小）第3学年及び第4学年

- (1) 健康な生活（健康な生活、1日の生活の仕方、身の回りの環境）
- (2) 体の発育・発達（体の発育・発達、思春期の体の変化、体をよりよく発育・発達させるための生活）

（小）第3学年及び第4学年

- (1) 心の健康（心の発達、心と体との密接な関係、不安や悩みへの対処）
- (2) けがの防止（交通事故や身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがとその防止、けがの手当）
- (3) 病気の予防（病気の起こり方、病原体が主な要因となって起こる病気の予防、生活行動が主な要因となって起こる病気の予防、喫煙、飲酒、薬物乱用と健康、地域の様々な保健活動の取組）

（中）第1学年・第2学年及び第3学年

- ・健康な生活と疾病の予防（健康の成り立ちと疾病の発生要因、生活習慣と健康、生活習慣病などの予防、喫煙、飲酒、薬物乱用と健康、感染症の予防、個人の健康を守る社会の取組）
- ・心身の機能の発達と心の健康（身体機能の発達、生殖に関わる機能の成熟、精神機能の発達と自己形成、欲求やストレスへの対処と心の健康）
- ・傷害の防止（交通事故や自然災害などによる障害の発生要因、交通事故などによる傷害の防止、自然災害による傷害の防止、応急手当）
- ・健康と環境（身体環境に対する適応能力・至適範囲、飲料水や空気の衛生的管理、生活に伴う廃棄物の衛生的管理）

4. 系統図からみる体育・保健体育の接続

ここでは、作成した系統図から見えてくる、小学校体育と中学校保健体育の接続の特徴を、特に旧学習指導要領との比較から見て行くことにする。

1) 体づくり運動

旧学習指導要領では、「多様な動きをつくる運動遊び（低学年）」→「多様な動きをつくる運動（中学年）」→「体力を高める運動（高学年、中学校）」という流れで、中学校第3学年の段階で「体の柔らかさを高める、巧みな動きを高める、力強い動きを高める、動きを持続する能力を高める」ことが求められていた。対して新学習指導要領では、「体力を高める運動」が「体の動きを高める運動」と名称が変わり、先の中学校3年生段階で求められていた運動能力は2年時までに早められ、新たに第3学年に「実生活に生かす運動」が新設され、「健康に生活するための体力の向上を図る運動の計画と実践」と「運動を行うための体力の向上を図る運動の計画と実践」が掲げられた。これにより、この領域の運動は「多様な動き」の獲得（小学校低・中学年）から「体の動きを高める（高学年、中学校第1・2学年）」運動へ、そして最終的にはそれらが「実生活に生かす（中学校第3学年）」ことのできる運動へと展開を見せることとなった。

一方、「体ほぐしの運動」では、中学校段階で「仲間と協力して課題を達成するなど、集団で挑戦するような動きを通して、気付いたり関わりあったりすること」が新たに加わった。また、ただ運動を行うだけではなく、「気付いたり関わりあったりすること」と表現され、仲間との関係における気付きや自身の気付きを促している。

2) 器械運動

器械運動は、今回の改定において系統性を

はっきりと打ち出した。旧学習指導要領では中学校段階において示されていた「接転」「ほん転」「平均立ち」などが、小学校中学年段階の技においても「回転系・接転技群・基本的な前転グループ」のように表記されるようになり、技の系統性が以前よりわかりやすくなった。このことにより、小学校と中学校の接続がより鮮明化され、ある技が最終的にどのような技に繋がっていくのかを、教師のみならず児童生徒も知ることができ、技の系統性を意識できるようになったと言える。

○マット運動

小学校旧学習指導要領では、表記こそないが、マット運動は「回転系」と「倒立系」に区分されていた。¹⁰⁾これが、今回の新学習指導要領では「ロンダート」や「頭倒立」からの「頭はねおき」などは全て「回転系・ほん転技群」に分類され、倒立系は「補助倒立」からの「倒立」、そして中学校ではそこからの「倒立ひねり」のみとなった。つまり、倒立を経由しての技は「回転系・ほん転技群」の扱いになったことになる。

細かなところでみていくと、小学校段階で「前転」と「跳び前転」の中間に位置していた「大きな前転」が新学習指導要領ではなくなり、前転からの流れは、「前転」→「開脚前転」→「伸膝前転」となり、倒立からの「前転」（「倒立前転」）が「補助倒立前転」→「倒立前転」・「跳び前転」と位置付けられている。マット運動を概観すると、旧学習指導要領の中学校の技が小学校の発展技として例示され、小学校でその系統の技の最終的な形を示すようになった。これは、鉄棒や跳び箱に言えることである。

○鉄棒

大きな変更は、支持姿勢の状態になるために鉄棒に上がる「上がり技」ならびに、支持姿勢から地面に下りる「下り技」の区分が、小学校でなくなったということである。例えば旧学習指導要領にあった「上がり技」とし

での「膝掛け上がり」や「もも掛け上がり」は「支持系・前方支持回転技群・前転足掛け回転グループ」に分類され、中学校での「け上がり」に続いていく。同様に、「上がり技」に分類されていた「逆上がり」は、旧学習指導要領では分類上、中学校に接続していなかったが、新学習指導要領では「支持系・後方支持回転技群・後転グループ」に分類され、中学校での「後方伸膝支持回転」や「後方浮き支持回転」に繋がるよう系統付けられた。¹³⁾

○跳び箱

「切り返し系」では、「大きな開脚跳び」がなくなり、小学校段階の開脚跳びの発展はなくなる。一方で、「かかえ込み跳び」は小学校段階で「屈伸跳び」までが入った。

「回転系」では、「大きな台上前転」が「伸膝台上前転」に代わり、小学校段階で「前方屈腕倒立回転跳び」までが入った。表記的に見ると、「台上前転」と「頭はね跳び」に系統性を持たせず、別の扱いがされるようになったことが窺える。

3) 水泳

小学校での水泳の系統性は、新学習指導要領で大きく変わった。旧学習指導要領では、「水遊び」→「浮く・泳ぐ運動」→「水泳(クロール・平泳ぎ)」となっていたが、新学習指導要領では「浮いて進む運動」と「もぐる・浮く運動」の2つの系統がはっきりと明示され、前者はクロールや平泳ぎ、中学校での背泳ぎやバタフライといった競泳への流れとして、後者は小学校第5学年及び第6学年に新設された「安全確保につながる運動」につながる、身の安全を確保するための運動として位置付けられた。

4) 球技

旧学習指導要領の中学校「ネット型」でのバドミントン、卓球、テニスは中学校初出の種目であったが、今回の改定ではバドミントン、テニスが小学校高学年に配置され、これにより小学校「ネット型」も、中学校同様に

バレーボール系とバドミントン・テニス系の2つの柱に分けられた。

同様に「ゴール型」もバスケット・サッカー・ハンドボール系とタグラクビー・フラッグフットボール系と、運動種目の特性による分離が明示されている。なお、中学校の「内容取扱い」には、「ゴール型」において「タグラクビー」の履修について記載された。¹²⁾ これにより、小学校との接続を図ることも可能となった。

5) 武道

学習指導要領は、原則として柔道、剣道及び相撲に加えてその他の武道を履修させることが可能としている。新学習指導要領では新たに銃剣道が加わった。

「内容の取扱い」の(イ)には、「武道の運動種目は、柔道、剣道又は相撲のうちから1種目を選択して履修できるようにすることとしている」¹³⁾とあり、(ウ)には「武道は、段階的な指導を必要とするため、特定の種目を3年間履修できるようにすることが望ましいが、生徒の状況によっては各学年で異なった種目を取り上げることもできるようにする」¹⁴⁾とある。文部科学省のスタンスは、1つの運動種目を3年間実施させることにありとみて間違いない。但し、それは柔道や剣道、相撲を学ぶことであって「武道」を学ぶことにはならないのではないのかという疑念が生ずる。他の運動領域では、走跳投をもって陸上競技とし、マット・鉄棒・平均台・跳び箱の運動をもって器械運動としているのと同じく、武道を構成する運動の1種目の実施をもって「武道」を学んだと言えるのかは一考の余地がありそうである。

同様に、他の運動領域では、水遊びや表現リズム遊びのように、「〇〇遊び」が先にありその次に本来の運動がくるという順序を窺うことができるが、武道には「武道遊び」という要素は見られない。

これらの問題の根底には、身体運動的な視

点からの「武道」とは何かが明示されていないところにある。現状では、個々の武道の運動種目の総体が「武道」となっているが、個々の武道の運動の総体の共通項が示され、それを学習させることができれば、自ずと「武道あそび」が考案され、「武道」を学習させることができると思う。今後の課題となろう。

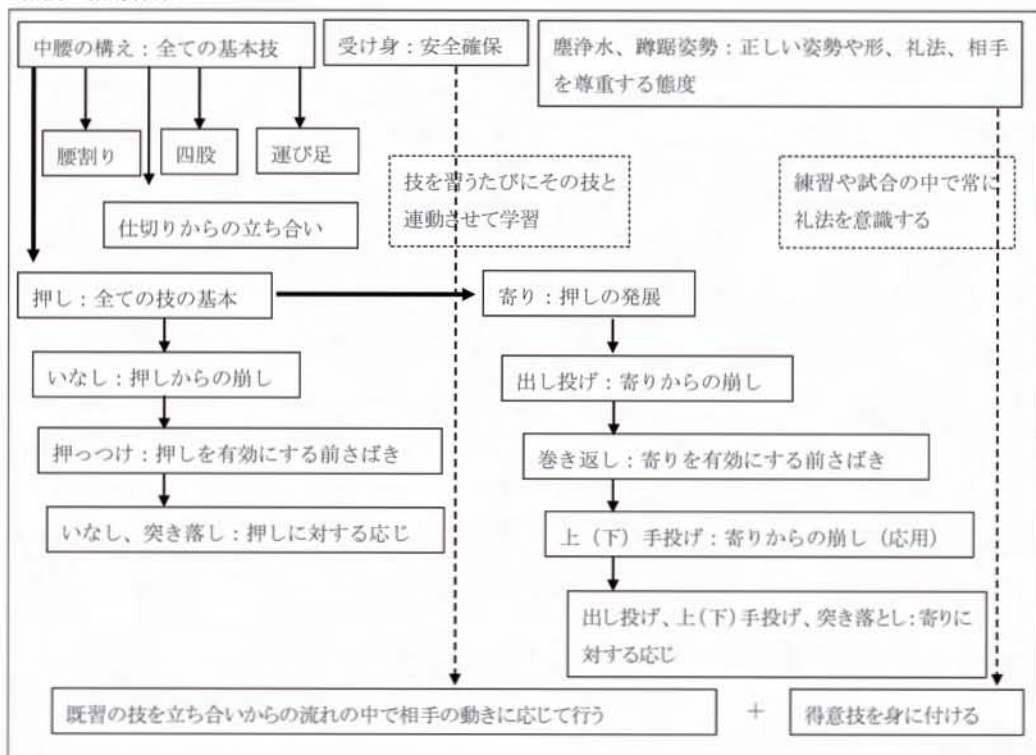
5. おわりに

体育・保健体育教科における「教科等の系統性・連続性を踏まえた学習指導」を行うための指標としての系統図を、平成29年版学習指導要領解説を読み解きながら作成し、若干の解説を試みた。今一度俯瞰してみると、2015年の拙稿と比してより系統性が明確になった感はある。その根底には、やはり小中一貫教育を推進していくといった施策があるものと推察する。

しかし、完成した系統図を見てもこれはあくまでも学習指導要領を基にして作成されたものであって、具体的に指導に活かすにはさらに手を加える必要があることを痛感する。本稿を終えるにあたって、最後に日本武道学会第51回大会において「武道等指導充実・資質向上支援事業に関わる武道指導に関する調査報告結果第三報（相撲）」⁽⁴⁾を公表された満留久摩氏の発表資料⁽⁵⁾を参考に、系統図作成の留意点についてまとめておきたい。（図-2）氏の相撲の技の展開図から導かれることは次の通りである。

- ① 学習指導要領に従って技の系統性を明示しているものの、技の展開の順序は本来の相撲の技の展開を優先している。
- ② 身に付けるべきことを動的、静的にわけ、しかし、それぞれが分離していないことが示されている。

相撲の指導体系



※第51回日本武道学会大会においての満留久摩氏発表資料を筆者が了解を得て一部加工

- ③ 相撲の専門家でなくても、技の展開の順序を追って指導することが可能となっている。

- ④ 一方で、この相撲の技の展開図は専門家でなければ描けない。

学習指導要領に示された系統図や本稿で提示した系統図はあくまでも概略図であり、各運動領域の系統性・連続性を踏まえた指導を行うに際しては、専門家の知恵を拝借してより深まりのあるものにする、“もう一手間”が必要となろう。このことを今後の課題として示しておきたい。

【文献】

- (1) 加藤純一「小中連携からみる体育・保健体育のあり方について ―運動領域の系統性を中心に―」、文教大学教育学部紀要第49集、2015年。
- (2) 佐藤豊編著『中学校新学習指導要領の展開 保健体育編』、明治図書、2017年。
- (3) 白旗和也編著『小学校新学習指導要領の展開 体育編』、明治図書、2017年。
- (4) 日本武道学会『日本武道学会第51回大会研究発表抄録』、日本武道学会、2018年。
- (5) 森良一編著『中学校・高等学校 保健科教育法』、東洋出版社、2016年。
- (6) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』、東洋館出版社、2008年。
- (7) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』、東洋館出版社、2008年。
- (8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説（平成29年告示）体育編』、東洋館出版社、2017年。
- (9) 文部科学省『中学校学習指導要領解説（平成29年告示）保健体育編』、東洋館出版社、2017年。
- (10) 文部科学省「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」2016年、http://www.mext.go.jp/component/a_

[menu/education/detail/_icsFiles/afie/ldfile/2018/01/19/1369749_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afie/ldfile/2018/01/19/1369749_1.pdf)

(2018年8月28日現在)

- (11) 文部科学省初等中等教育分科会第80回配布資料、「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」、2012年、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325896.htm (2018年8月28日現在)

【注】

- 1) 前掲 (11)。この「1 小・中学校間の連携・接続に関する現状、課題認識」に中1ギャップの問題に関する指摘がある。
- 2) 前掲 (1)、133～153頁。
- 3) 前掲 (10)、38頁。ここには、系統図や指導計画の作成・活用が掲げられている。
- 4) 同上、5頁。
- 5) 同上、5～7頁。
- 6) 同上、37～51頁。
- 7) 同上、37頁。
- 8) 同上、37～41頁。
- 9) 確かに保健体育の「学習指導要領解説」には系統表が載せられてはいるが、やはりここでも指摘されているように、手を入れる余地が十分にあるものでしかない。
- 10) 前掲 (6)、138頁。
- 11) 小学校の旧学習指導要領での「逆上がり」は「上がり技」に属し、「支持回転系」の例示にはなかった。新学習指導要領において「支持系 後方支持回転技群」に位置付けられたことにより、中学校での分類と整合性が図られたことになった。
- 12) 前掲 (9)、138頁。
- 13) 同上、165頁。
- 14) 同上、166頁。
- 15) 前掲 (4)、82頁。なお、指導の系統を示した資料は当日配布のため、ここには記載されていない。